

「生き方」に関する校種間連携のカリキュラム開発

山梨大学教育人間科学部附属4校の状況分析

Curriculum Development of “Ways of Life” in Cooperation with
Yamanashi University Faculty of Education and Human Sciences
Attached Schools

林 尚 示¹, 奥 山 賢 一², 望 月 尊 福², 清 水 晃 彦³,
HAYASHI Masami, OKUYAMA Kenichi, MOCHIZUKI Takahiro, SHIMIZU Akihiko,
石 田 夏 子³, 矢 崎 育 子⁴, 日野原 仁 美⁴, 武 川 はる美⁵,
ISHIDA Natuko, YAZAKI Ikuko, HINOHARA Hitomi, MUKAWA Harumi,
荻 原 ひろみ⁵, 進 藤 聡 彦⁶
OGIHARA Hiromi, SHINDO Toshihiko

要約：本研究は、「生き方」に関して附属学校4校の学校種別（以下、校種と略す）を連携したカリキュラムの開発を目指しており、本稿の目的は、附属小学校、附属中学校、附属養護学校、附属幼稚園の状況分析をすることにある。本学の場合、それぞれの附属学校と学部が隣接しているという地理的メリットを積極的に生かし、附属学校の役割を明確化していくために、附属学校4校のすべてを研究対象とした。そして、研究の視点を、「生き方」に関連する教育実践に限定し、各附属学校での教育を統合し、「生き方」に関して校種間で連携の取れたカリキュラム開発をすることを最終目的としている。

キーワード：「生き方」、校種間連携、カリキュラム開発、附属学校

1 問題の所在

本学教育人間科学部では、「実践教育運営委員会」により、「生き方」に関するカリキュラムの「共同研究会」を組織することが2000年2月に決められた。その委員会での「共同研究会」に対する要請は、「生き方」に関するカリキュラムを共同で開発することであった。具体的な目標としては、「附属校がそれぞれの発達段階を踏まえた上で、幼・養・小・中の体系的なカリキュラム」を開発し、「本学の教育の一貫性を独自な形で社会に示すこと」である。そして、学部と附属学校の教員計10名で「生き方」に関するカリキュラムの「共同研究会」が組織され、定期的に研究会を開催している。

なお、今回のプロジェクトでの「生き方」は主として附属中学校の総合学習「SELF」で実践されているSELF A「生き方学習」から派生したものである。附属中学校の研究

¹附属教育実践研究指導センター，²附属小学校，³附属中学校，⁴附属養護学校，

⁵附属幼稚園，⁶学校教育講座

紀要によると、「生き方学習」とは、「生徒たちが『自分とはいったい何者なのか』『自分だけの持つ価値は何か』といったアイデンティティや自己価値観を育てる学習」とされている。本稿では、まず各附属学校の現状分析を研究の内容とするが、具体的には、それぞれの附属学校で実施されている現在の教育実践の中で「生き方」に関連する教育内容を各附属学校教員の視点より分析するという研究方法をとる。その上で、各附属学校での教育実践の現段階での特質を総括し、今後のカリキュラム開発のために役立てたい。

2 附属小学校におけるこれまでの「生き方」教育および校種間連携の教育実践

2 - 1 「心と実践」の時間について

附属小学校では、平成10年度から「心と実践」の時間を教育課程に位置づけ、「生き方」についての統合的な学習活動を展開している。この位置づけは、文部大臣指定の「研究開発学校」の指定を受け、独自の教育課程を実践研究できる立場にあったので、児童の実態と教師の願いを前提に、他の「総合学習」や「パソコンタイム」とともに創設した。「心と実践」の時間は、従来の「学級活動」と「道徳」の時間を併せている。その背景としては、児童の実態を次のようにとらえたことがあげられる。

悪いことについて.....わかっているが、やめられない。やってしまう。

人との関わりについて.....組織的、協調的に進められない。人に関心がない、関われない、人に働きかけられない。トラブルをおそれ回避へ向かう、無力な素直さ。

自分（自意識）について.....夢がない。自尊心、自己有用感がない。自己意識、命の自覚がない。

また、従来の道徳の時間では「徳目」を広く学習する内容であり、しかも学級での問題行動等に対する学級指導の時間を多く要していた実態などから、道徳の時間も学級指導的に扱われ、軽視されていたこともあり、「実践的な道徳力の育成」を全面に、「心と実践」の時間を創設した。

2 - 2 現在の位置づけ

現在は、1週に2時間の「心と実践」の時間を時間割表に位置づけ、以下の6つの領域に分けて、活動を展開している。

表1 附属小学校 学年別 各単元時数表 1単位時間は45分（年間35週）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
人間関係づくり	25	22	20	20	23	26
学級タイム	26	27	27	27	27	27
わたしたちの学校	22	24	29	29	29	26
健康タイム	6	6	6	6	6	6
大切な命	8	6	6	6	6	6
生活の決まり・マナー	5	5	5	5	5	5
年 間 計	92	90	93	93	96	96

* 特設枠（学期はじめ、学期末等）が加わった時数である。

2 - 3 「心と実践」の目標と内容一覧

「心と実践」教育全体目標

体験的な活動や、主体的な集団活動を通じて、自分自身の成長や、自分と集団や社会とのかかわりに関心を持ち、自分のよりよい生活を築いていくようにさせるとともに、その過程で必要となる社会の基本的なきまりやマナーについてとらえさせ、それらをきちんと守っていくことができるようにする。

「心と実践」分野別目標

自分の成長や生命に関わること 成長・生命

自他の心身の成長をとらえ、互いに健康で安全に生活していけるようにするとともに、生命を尊重することができるようにする。

人とかかわりや集団での責任ある行動に関すること ふれあい・協力

理解と思いやりの心をもって、だれとでも関わっていけるようにするとともに、自他の立場や役割をしっかりとふまえ、話し合いを通してみんなで協力し合って生活していけるようにする。

社会規範やマナーに関すること

集団や社会で必要となる基本的な決まりの大切さを理解したり、マナーの具体的な様子を身につけたりし、それらをきちんと実行してよりよい生活を築こうとする態度を養う。

表 2 附属小学校単元別の内容

	第 1・2 学年	第 3・4 学年	第 5・6 学年
大切な命	自分の成長を喜び、生命を大切にすることを。	生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。	生命をかけがえのないものとしてとらえ、自他を尊重する。
健康タイム	健康や安全に気をつけて、規則正しい生活をする。	健康や安全に気をつけて、節度ある生活をする。	生活を振り返り、自分自身の健康管理ができる。
人間関係づくり	助けたり助けられたりする体験を通して友達の思いやりに気づく。	自分や友達の個性に気づき、それぞれが自分を肯定的にとらえる。	友達と助け合い、信頼し合って、友情を深め広げていこうとする気持ちをもつ。
私たちの学校	自分たちの学校という意識をもち、楽しく学校生活を送ろうとする。	自分たちの学校をより楽しくするために、できることを進んでしようとする。	進んで学校生活に参加し、みんなで協力し合ってよりよい校風をつくろうとする。
学級タイム	自分の考えを出し、人の考えも静かに聞こうとする。	仲間とともに、力を合わせてよりよい学級をつくろうとする。	集団の一員として自覚を深め学級生活の向上を目指し自分の責任を果たそうとする。
きまり・マナー	行ってよいことと悪いことについて理解することができる。	礼儀やマナーの大切さに気づき、進んで守ろうとすることができる。	上級生としての自覚をもち、自分たちの力でよりよい生活を築こうとする。

2 - 4 校種間連携の実践

小学校と幼稚園の間では、毎年 1 年生と年長児の交流活動が「生活科」の実践として 2 月に実施されている。また、養護学校との交流については、4 年生が「総合学習」の中で

行っているが、120名の小学生と十数名の養護学校小学部の子どもたちでは、人数的な差が大きく、昨年度はいろいろな方々との交流の1つとして、1回に10名から20名程度の4年生が養護の子どもたちと交流をする形をとった。また、10月末の「あおぎり祭り」では5年生が養護の子どもたちを招待して、一緒に祭りを体験している。中学校との連携については、1日体験入学（オリエンテーション）が6年生に行われている。

3 山梨大学教育人間科学部附属中学校における「生き方」に関する教育について

3 - 1 附属中学校の「生き方」に関する教育の概要

附属中学校の「生き方」に関する教育は、主に「総合的な学習・SELF」の中の「SELF A」の中で、各学年年間35時の枠で行われている。

「SELF A」は「総合的な学習・SELF」の中の4つの領域の1つであり¹⁾、「自己を見つめるとともに、人間関係をつくる力の育成」「自分の将来を見据え、適切な方向に自分を仕向けていく力の育成」をねらいとする学習活動である。

本来、上記のねらいは、「特別活動」の中の「学級活動」の時間枠で計画的に行っていくものである。しかし「学級活動」の時間は、その多くが学級や学校の生活上の諸問題や行事の準備等に費やされており、上記のねらいをじっくりと取り組むことは難しい状況にある。

そこで、週1時間の「特別活動」以外に、上記のねらいをじっくりと取り組む学習として、「生徒自らが、自分自身の個性に気づき、社会性を身に付け、人生（生き方）について考え、目的的に体験や実践を求めていくように仕向ける学習」として再構成し、「総合的な学習の時間」の枠の中に「SELF A」として設定した。

3 - 2 「SELF A」の具体的内容

3 - 2 - 1 「6つの小テーマ」

本校では前期・後期制度を行っているため、中学校生活3年間は大きく6つの時期に分けられる。そこで、「SELF A」のねらいに近づくため、6つの時期に生徒の成長過程を踏まえ、以下のような小テーマを設けた。

表3 6つの小テーマ

成長過程	1年生前期	1年生後期	2年生前期	2年生後期	3年生前期	3年生後期
小テーマ	中学校生活への適応	自己を見つめる	集団の中の自分	社会を見つめる	将来を見つめる	進路決定期を迎えて

3 - 2 - 2 具体的実践

A 1年生後期 「より豊かな生き方を求めて」

中学校1年生（13歳）は、その多くが「自分はいったい何物なのか」「どんな場面でどう考えどう行動するのが自分なのか」といった「自分探し」を始める年齢であり、成長の中で大きな節目の年齢であるといわれている。そこで、この「自分探し」をより豊かに充実させるための支援として、「自己理解」の場を以下のように設定した。

ステップ1：自己理解を深める

中学3年間の学校生活の中で、どの場面に、どう感じ、どんなことを考えるのかを想定し、予想させ自分を見つめる機会とする。POEM（生徒理解検査）の検査結果と自己の思いとの比較を通して、自分を振り返る。また、POEM（生徒理解検査）の検査結果を友人と家庭で評価してもらい、もう一度自分を振り返ることを目的として、自己紹介文を作る。

ステップ2：身近な人の生き様に触れ、今の自分を考える

親が一人の大人としての立場から、2つの視点（日々の生活を踏まえた人生観と職業観）を踏まえた手紙を書き、子供がその手紙を読み、返事を書くことで、身近な人の人生観や職業観などを知る。社会で活躍している先輩を招いて、実生活の様子や職業観などを聞き、自分なりの職業人（社会人）のイメージを作り、将来どんな人（職業や生き方を含む）になりたいかをまとめる。

B 2年生後期：「職場体験学習」

「SELF A」は、生徒達が「自分とは何か」「自分にとって生きるとはどういったことなのか」といった自己価値観を育てる時間であるとともに、「自分の将来を見据える目」「将来生きる社会を見る目」を育てる時間でもあるという観点から、実際の職場へ出かけ、見学だけではなく仕事も「体験」する場として、以下のように設定した。（実際の「体験」は2日間）

ステップ1：職場選択と事前学習を行う

主体的に自分（達）の体験したい職業を選び、事前調査を行い、その職業について知識を身に付ける。訪問依頼の電話やインタビューなどの仕方などをロールプレイで行い、教師や友人の評価をもらい、自己の人との対応の仕方について振り返る。

ステップ2：職場を訪問し、仕事を体験する

自分なりの目標を持ち職場を訪問し、職場の人と一緒に仕事を体験することで、そこに働く人の生き様（働くことの厳しさ、責任感、誇り、社会生活のマナーなど）を具体的な行為や会話の中から感じ取る。職場訪問の中での成果と課題をシートにまとめ、この活動を通して自分の心の中にどんな変化があるのかを見つめる。学級で、自分の体験の発表を通して、様々な職業やそれらの職業の中に共通する部分や固有な部分を感じ取る。

3年生の実践は紙面の関係で割愛する²⁾。

3 - 3 実践を通して

「SELF A」を始めて1年、いくつかの成果と課題が見えてきた。

成果としては、「自分を見つめる」「自分の将来について考える」時間が、週1時間の「学級活動」の時間以外にしっかりと確保できたことである。そして、このことが、教師側にとっては、実践を通しての、学年ごとの年間計画や資料作成を可能とした。生徒側にとっては、授業の中で扱うことで、何となく恥ずかしさや照れを感じたり、また当たり前のこととしてむしろ深く考えない内容に、正面から向かい合うきっかけとなったこと。しかも、自分だけでなく友達がその内容についてどう感じ、何を考えているのかなどを知ることができ、自分を相対的に見ていくことの場ともなったことである。

細部での課題としては、「SELF A」の各1時間の題材や何時間かで組む単元の内容・構成等の吟味と手直しがある。特に、先に述べたような「何となく恥ずかしさや照れを感

じたり、また当たり前のこととしてむしろ深く考えない内容」に関しては、その進め方に、より体験等をどう組み込むかなどの工夫が必要である。

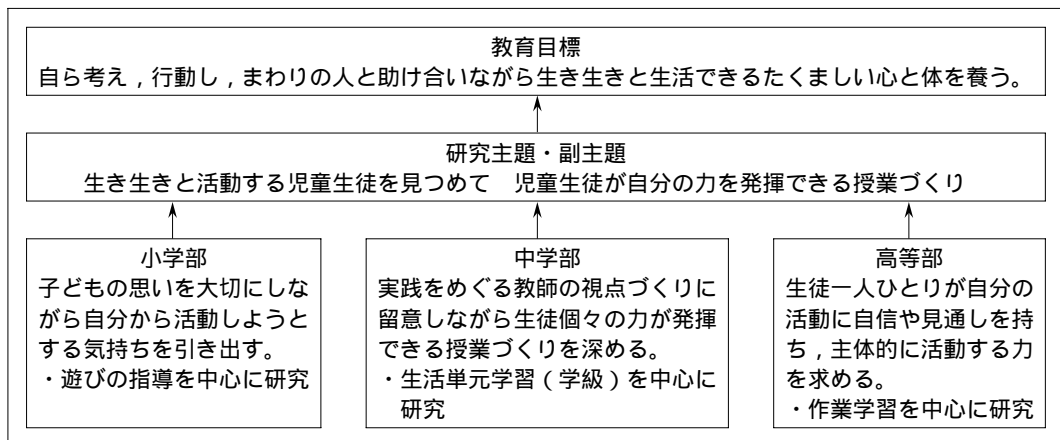
教育課程全体からは、「『SELF A』と学校行事や道德等の関連をどう整えるのか」また、「小学校で行ってきた内容・手法の重複や発展性をどう系統立てていくのか」等がある。

4 山梨大学教育人間科学部附属養護学校における「生き方」に関する教育について

4 - 1 附属養護学校の概略

附属養護学校の「生き方」に関する教育については、本校の教育目標である「自ら考え、行動し、まわりの人と助け合いながら生き生きと生活できるたくましい心と体を養う」をめざした、昨年度・今年度の研究・実践内容に沿って報告する。昨年度は、児童生徒が自分の生き方をより豊かにできるように、「児童生徒の主体性や生き生きと」ということに注目し、「生き生きと活動する児童生徒を見つめて」の主題と「児童生徒が自分の力を発揮できる授業づくり」の副主題のもとに研究した。児童生徒が現在の授業で自分の力を発揮できるように、そして、個々の未来に向けて生き生きと働きかける力を発揮できるように、というねがい・ねらいのもとに各学部での視点を持って研究した（下図参照）。

図1 附属養護学校における研究の概要



研究を通しての授業づくりにおいて、教師間で連携を図りつつ、より深い実態把握をしながら、支援の手だてを探るために何度も考察を行い続けたことにより、少しずつ生き生きと活動する児童・生徒への変容に結びつけていくことができた。これらの成果を「日々の授業づくり」に生かし、さらに児童・生徒・教師の人間的なつながりを深めていくことが、より生き生きと活動する児童生徒の実現に結びついていくことが確認された。

今年度の研究の主題は「生きる力を育む学校の創造」、副主題は「実感を伴った学習を創る」として、3年計画で研究を始めている。

4 - 2 今年度の研究主題、副主題の設定について

児童・生徒にとって授業で最も必要な基礎は、自分とのつながりが持てることである。

私達教師は、題材や教材を選定し、それを指導する際に、児童・生徒との関わり方に考慮しつつ授業をつくっている。これらの授業をつくる要素の一つ一つが児童生徒との接点を持っているなければならない。

その接点とは、児童・生徒が生活全般の中で経験して得た様々な事柄と我々が用意した授業を構成している要素とである。児童・生徒はより解りたいがために、授業の中で、自分の中にあるすべてのものを発揮して教師との接点を求めているはずである。これらがつながりを持ってこそ、児童・生徒は感覚を開くことができたり、理解することができたりする。この時、それまで児童・生徒が持っていた知識、経験などに、新しい対象（物、考え方の他いろいろ）が提示された時、その対象との出会いを通じて、「触ってみよう」、「やっぱりそうだ」、「いや、違う」というように、児童・生徒の心が動き始める。この心の動きは、対象との、心の深い部分での出会いといった、感情的ともいえる体験から生じると言えよう。そして、自らこれらの刺激を整理していく過程（融合、区別、分類等）が学習であるといえる。だからこそ授業は子どもの感情をゆさぶり、心にひびくものでなければならない。そういった学習こそ「実感を伴った学習」である。児童生徒の心にひびく授業をしていくことで授業が分かりやすくなり、ねらい・ねがいが達成され、最終的に生きる力につながっていくと考えた。

今年度の現状は現時点での小学部での研究の報告にさせていただく。

小学部での研究経過（平成12年度4月～9月）

- (1)児童の実態把握……児童を知るために児童の行動をビデオで撮影し、ビデオを見ながら全児童一人ひとりの行動を分析し、背景を探った。
- (2)実感とは何かの話し合い……実感とは心の動きが伴うもの、児童一人ひとりにとって違うものである。
- (3)児童一人ひとりにとっての実感を探る……児童をより深く知る事で個々の実感が何か見えてくる、児童を知るために児童の行動を見る／背景を探る
児童に対する願い、期待する姿、指導の重点、児童一人ひとりに合った実感を伴った授業づくり
・個に応じた願いやねらいをもとに、授業の願いが設定されなければならない。
・その授業の中で何を育てるかではなく、何を育てるためにどんな授業を作っていくのかを考えていかなければならない。

- (4)実感を伴った授業のポイントの考察であがったキーワード（KJ法等）

児童の内的な環境（背景）、制約のない（少ない）環境

見通しが持て期待が持てる授業、わかりやすい授業、選ばれた素材・教材・題材

子どもの反応が変化する、今までの体験と結びつく、未来の体験につながる

このような方向性で現在(3)(4)を相互に関連させながら研究を進めているところである。

実感を伴う授業づくりをすることで、生き生きと生活できる児童生徒の「生きる力を育む」ことができるように更に生き方について研究を進めたい。

5 山梨大学教育人間科学部附属幼稚園における「生き方」に関する教育について

5 - 1 附属幼稚園における「生き方」

最近の子どもたちを取り巻く家庭環境と社会環境の変化は、子どもの成長発達に、深刻な影響を及ぼしている。最近の少年事件においては特に幼児期の過ごし方、心の教育が問われている今、従来の教育課程の枠組みでは対応できないような状況が生まれてきている。学校教育の中で幼稚園からの一貫した心の教育、「生き方」を幼稚園としてどのようにとらえるか、幼稚園教育の特質的な部分でもあり幼児の生活の中心でもある「遊び」の持つ意義を再確認し、本園の幼児の実態から検証する。

5 - 2 幼稚園教育にとって、「遊び」とは

遊びは幼児にとって大切な学習である。幼児の興味や発想など自分の意思で始める遊びには、その子なりの目的があり、それに向かって考えたり、試したり、工夫したり、努力したりなど多様な経験を身に付け、自主性・創造性を身に付ける。そして何よりも大切なのは仲間関係である。子ども同士で遊ぶことは、実はたいへんな努力が必要であり、ぶつかり合いや葛藤や挫折など様々な体験を味わいながら、人とのかわり方や仲間と共に遊ぶ喜びを学ぶのである。このように遊びを通して幼児は総合的に学んでいくのであり、自分なりの生き方を身に付けていくと考えてよい。

5 - 3 園児の実態から

本園の園児の実態を見ると、子どもたちの中には虫を見ても実際に触ってみようとするのではなく、「これ知ってるよ」と本やテレビで見たことだけで理解していると思込んでいる子、自分で遊びを見つけようとするのではなく、いつまでもぶらぶらとしていたり、教師と一緒になければ遊べない子、また逆に自分のしたいことはたくさんあるけれど、やりたいことさえできれば満足で、まわりの友達の様子に気付かずにいる子なども多い。幼稚園に来て、自分のまわりの環境や友達に興味・関心が向けられない子どもが増えてきている。これらの姿から子どもたちに欠けているものは、自分の体を使っての直接体験。

集団の中で自分らしく表現していく力。他者を受け入れ共存できる関係。以上の3点が見えてくる。

5 - 4 本園における「生き方」についてのとらえ方

これらをふまえると、幼稚園における「生き方」については、次のように据えられるのではない。

「その子らしさを表現しながら、まわりのもの（環境や他者）とどう関わっていくか」

はじめて親から離れ、同世代の子どもと集団生活をスタートする3歳・4歳・5歳の幼児が、不安や戸惑いに立向かいながら、やがて自分なりの方法で自分の居場所を見付けていく。そして自分らしさを表現しながら、物や人と関わっていくことができるために、何を身に付けさせていくべきか、環境や教師の援助・指導の在り方を含め、小・中学校の発達を見通した「生き方」の教育を考えていきたい。

幼稚園における「生き方」を「その子らしさを表現しながら、まわりのものとどう関わっていくか」ととらえ、実践を通して考えてみた。

5 - 5 実践を通して

5 - 5 - 1 新しい環境に慣れる - 入園後間もない頃の登園の姿から (3歳児)

お母さんの手をぎゅっと握りしめ、不安そうに部屋の様子をうかがっているH男。最近ようやく涙は消えたけれど、身支度をしている間も「まだいかないで」とお母さんの手を離さない。支度ができると「もういってもいいよ」とお母さんの手を離す。自分の気持ちを切り替えるかのように、顔がぎゅっと緊張し、握る手は母親から保育者にバトンタッチされる。

5 - 5 - 2 自分の居場所を探して まわりとの関わり合い方を模索する姿から (4歳児)

生活の中でいつもちょっとしたことでぶつかるK子とA子。この日もM子の隣に座りたかったK子。お帰りの支度が遅いK子が、もう並んでしまっているA子の近くで「すわりたいの」と言っているが、A子は黙ったまま動かない。保育者がいこうとすると、そこへT男が、やってきて、2人の様子に気がつき「どうしたの。隣にすわりたいの」と聞く。うなずくK子にT男は「じゃあさ、じゃんけんすればいいじゃん」とさらっと言う。2人がじゃんけんし、K子が負けると、今度は、「ここをあげればいいじゃん」とA子の反対側を指さす。M子が寄ってくれてK子も一緒にすわることができた。

5 - 5 - 3 仲間と共に 自分たちで生活を作り出そうとする姿から (5歳児)

昨日、保育者のなげかけから始まった転がしドッジボール。K男、T男、J男、D男、M男、A男と昨日のメンバーが続きをやり始めていた。そこへ、興味を持ったN男、Y男が、「いれて」と入ってくる。「いいよ」と2人を入れての遊びがしばらく続いた。しかし、大勢になってボールがなかなか回ってこなくなり、M男が、「つまんない」と言い始める。T男が、「僕のところにボールがちっともこない」と座り込んでしまう。それを聞いたO男が、「3つ数える間だけしかボールをもっちゃいけないことにしようよ。そうすれば、ずーっとボールをひとりじめにする人がいなくなるから」という。O男の言うようにやってみると前より早くボールがまわりみんなでゲームを楽しめるようになった。

5 - 6 まとめ

この3つの実践事例は、毎日の保育のほんの一コマである。1番目の事例は、入園して間もないH男が自分なりに親から離れて、新しい環境になれていこうとする様子がよくわかる。保育者は、園生活においては、子どもにとっての基地である。基地を揺るぎないものにすることで、次へのステップが踏み出せるようになる。2番目の事例は、K子が、まわりと関わる中で、自分の思いを表現し、まわりの友達とどう関わっていけばよいのかを模索している姿が見られる。3番目の事例は、友達と一緒に楽しく遊びを続けるためのルールを考えていく年長児の姿である。傍らに保育者がいてもそれには頼らず、自分たちでルールを作り出そうとしている。初めての集団生活である幼稚園で過ごす3年間あるいは2年間で、一人ひとり、それぞれの成長の過程に寄り添いながら、これからの「生き方」の土台をしっかりと作っていきたいと考えている。

6 おわりに

「共同研究会」が組織された目的は、4校園で系統的、体系的に「生き方」に関する有効なカリキュラムを作成することは可能なのかについて検討することであった。そして、

可能な場合は共通の目標の下に、どの校種のどの学年でどのような学習援助が可能なのかを具体的に明らかにすることであった。そのために、今回は「生き方」に関わるこれまでの各校園の教育実践の現状を明らかにし、上記の目的に資する資料を得たいと考えた。

各校園から報告された教育実践は以下のようなものであった。まず、小学校では「心と実践」の時間の設定に際して、道徳性について認知的な側面では達成されているが、それが行動的な側面に結びついていないこと、友人との対人関係が自己防衛的な反応としての対人関係の回避傾向、低い自己評価などが問題とされた。そして、この問題を解消すべく「心と実践」が行われた。そこでは「体験的な活動や、主体的な集団活動を通じて、自分自身の成長や、自分と集団や社会とのかかわりに関心を持ち、自分のよりよい生活を築いていくようにさせるとともに、その過程で必要となる社会の基本的なきまりやマナーについてとらえさせ、それらをきちんと守っていくことができるようにする」という目標が定められ、この目標の下に綿密な下位目標が低学年から高学年ごとに設定されている。こうした目標の設定の仕方は、下位目標に対応する具体的な援助法を考えやすくするものであり、今後の「生き方」カリキュラムを作成する上でも参考になろう。なお、「心と実践」は既に述べられたように文部省研究開発学校の指定に基づき、2000年3月までの3年間試行されたものであり、現在、評価段階にまで至っていないと思われる。しかし、これらの実践により子ども達にどのような効果もたらされたのかについての評価は、本「生き方」カリキュラムを作成する上で、貴重な資料となると考えられるので、今後、研究成果についての詳細な報告が待たれるところである。

中学校では、エリクソンの発達漸成理論に基づき、中学生の時期をアイデンティティが形成される時期だと捉え、アイデンティティの確立に向けた学習援助の場が設定された。そこで目指されているのは、社会の中での個の確立だと考えられる。小学校と同様に、「自己を見つめるとともに、人間関係をつくる力の育成」「自分の将来を見据え、適切な方向に自分を仕向けていく力の育成」という目標の下で各学年を前後半に分け、その時期ごとの下位目標が設定された。特に、卒業時までに進路決定をしなくてはならないことを意識してか、職業的アイデンティティの形成に関する目標が設定されているのが印象的である。なお、教育効果を定量的に把握するために、心理検査が用いられているのが新しい試みといえるであろう。

養護学校では、小学部について「実感を伴った学習」が援助目標として設定されていた。これは、いわゆる「生きる力」の前提になるものであり、これからの学校教育に求められるものである。養護学校では個々の児童の行動分析を通して、個々の児童にとっての実感を伴った学習はどうあるべきかを検討するという手間のかかる作業をしている。各学級40名という多人数の小中学校でこれを実施することは困難だと思われるが、子ども達の実態を内的、外的行動から探究し、それに応じた目標と援助法を明らかにしようとする方法は今後の「生き方」カリキュラム作成の上でも考慮に値すると考えられる。

幼稚園については、幼児の実態として、直接体験が少ないこと、集団の中での自己を表現する力が弱いこと、他の子どもを受容し、その関係の中での対人関係が不十分であること、という認識が示された。そして、このような実態を踏まえ「その子らしさを表現しながら、まわりのもの(環境や他者)とどう関わっていくか」ということが「生き方」の学習の目標となると提案された。そして、その目標に適うような幼稚園の日常の事例が

紹介された。そこでは、幼稚園で学習の場とする「遊び」が、子どもどうしの協同学習の場となっていることが示されている。また、そこでの教員の役割は、「成長の過程に寄り添う者」と位置づけられている。この点では、綿密な目標を設定し、その到達を目指すといった形式をもつカリキュラムが作成できるのか今後の検討を要するところである。

以上を概観すると、いくつかの共通点が見出せる。まず、各校園の目標について共通するのは幼・小・中の各校園では対人関係に関わる事柄が問題点として指摘されたり、目標として設定されていた。また、養護学校でも「まわりの人と助け合いながら」という他者との関係に言及する教育目標が立てられている。こうした対人関係に関わる問題は「生き方」カリキュラムの目標となる可能性がある。また、学習の方法として、小学校で挙げられた認知面と行動面の乖離、養護学校で指摘された実感を伴った学習、幼稚園で指摘された直接体験が少ないこと、などは状況論で学校知と批判されているものに言及したものと捉えられよう。その改善としてたとえば中学校では職場体験が導入されている。また、幼稚園の「遊び」の重視も同様な考えに基づくものであろう。具体的にカリキュラムが作成され、それを実施する際には子ども達にとって「生きた力」になる「生き方」の学習が必要になる。その際の方法として、日常の文脈に位置づけるような教育方法の在り方はいかなるものかについて、状況論なども検討していく必要がある。

今後、「共同研究会」では4校園で共通の目標の設定を試みる。そして、各校園の各学年ごとに、さらには附属養護学校で指摘されたように場合によっては、個々の子どもごとの下位目標を設定し、その達成に向けた援助方略を授業案の形で考えていくという作業が必要になろう。その際に、これまでの各校園の実践を踏まえ、既存のもので有効に機能している場合にはそれを資料としながら、より洗練させていくということが必要であろう。

その際に、考慮しなくてはならない点は、既存のカリキュラムの中にどのように位置づけていくのか、内部進学者が多く、系統性が確保されやすい幼稚園・小学校・中学校間の連携は比較的、系統性をもったカリキュラムが作成しやすいが、養護学校との連携をどのようにしていくのか、などの問題を検討していく必要がある。そのためには、既に行われている小学校と養護学校間、中学校と養護学校間、更には小学校と中学校間の交流の評価をする必要もある。

7 註

- 1)「SELF A」以外に、環境・国際・福祉を扱う「SELF B」、個人探求を目的とする「SELF C」、コンピュータメディアリテラシーである「CML」がある。
- 2) 詳細は、山梨大学教育人間科学部附属中学校『研究紀要』(平成11年度)を参照。

8 主要参考文献

山梨大学教育人間科学部附属小学校『平成11年度初等教育公開研究会研究紀要』, 2000年。
山梨大学教育人間科学部附属中学校『平成11年度研究紀要』, 2000年。

（付記）本研究の各章の執筆は次の分担により行われた。要約・1 林，2 奥山・望月，3 清水・石田，4 矢崎・日野原，5 武川・荻原，6 進藤。